

学生と教員で作る文理融合リベラルアーツFD公開フォーラム

文理融合リベラルアーツ科目を受講して —受講学生の意見—

「生活世界の安全保障」系列受講生

古橋 まどか (文教育学部 人間社会科学科 グローバル文化学環 2 年)

では、「生活世界の安全保障」の系列から、発表させていただきます。文教育学部グローバル文化学環 2 年の古橋まどかです。よろしくお願いします。

お手元に資料があつて、スライドが載っていると思うのですが、その後で訂正して違う文があるので、基本的にこちらのスライドを見ているようにお願いします。

では、最初に私が履修した系列の科目を説明します。四つ履修しました。最初の「リスクの社会史」は歴史の話で、さまざまな地域や時代を専門にしていらっしゃる先生が数名いらして、順番にその専門の時代に起きたリスクとその回避について学びました。次の「平和と暴力」は、国際的な紛争や経済などさまざまなことを学んで、どうい理論がその分野にあるかということを知りました。次の「人間の安全保障」は、海外の人間の安全保障に取り組んでいらっしゃるゲストの講師の方を毎回お招きしてお話を伺いました。最後の「NPO インターンシップ」は、この中で私にとって一番印象深かった授業なのですが、先ほどから説明があるように、何種類か NPO があって、自分の行きたいところに行きインターンシップをするというもので、私は「もやい」という NPO に行きました。そこはホームレス支援を中心に日本国内の貧困問題に取り組んでいる NPO だったので、私はそこでのインターンを通して日本の貧困問題について考えました。

次に一つの系列を通して履修したときの私の意識ですが、まず履修前に、どうしてこの四つを履修することに決めたかということに関しては、特に系列を意識したわけではありません。どちらかというと、一つ一つの科目に興味があつて履修したら、偶然同じ系列だったという形です。しかし、リベラルアーツのパンフレットに載っていた「多角的に物事を見る力を養う」ということには興味を持っていました。

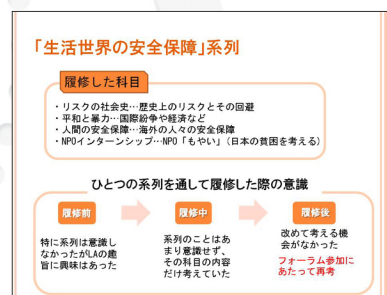
履修中なのですが、このときにはほとんど系列のことは忘れていて、一つ一つの科目に集中して受講していました。

履修後もあらためて考える機会がなくて、どのような意義がこのリベラルアーツにあったのかということは今までは考えていなかったのですが、このフォーラムに出席してくださいという依頼を受けてから、自分なりに考え直しました。

自分なりに考えた結果、まずそれぞれの科目で習った問題同士につながりがあるということを見つめました。ここでは一つの例を紹介します。まず、私は日本国内の貧困について「NPO インターンシップ」で学んで、海外の貧困について「人間の安全保障」で学びました。そして、そのようなもう一つの問題をとらえる枠組みとして、「平和と暴力」の授業で、「中心と周辺」という概念を学びました。

これはちょっと下の図で説明したいのですが、まず大きい枠が国で、国同士にも中心国と周辺国があつて、中心国というのは周辺国に対して力を行使できるような立場にあります。ただ、国の中も 1 色というわけではなくて、中心と周辺がどちらの国にもあつて、私が学んだような日本の貧困とか、国外の貧困というのはその周辺部分にあるということなどが分かりました。

このようにほかの科目で学んだことを組み合わせて考えることによって、自分の中に新しい問題がどんどん出てきて、例えば日本の貧困と海外の貧困というのはどのような関係があるのだろうか、違う部分、同じ部分というのはどういう部分なのだろうか、自分なりにいろいろと考えが深まりました。



一つの系列を通して得たことということで、四つの科目の中から、日本と海外とか、現在と過去、さまざまな危険と安全について学びました。そのことで、先ほど具体例で説明したように、問題同士がつながっているということが分かりました。そして、問題同士がつながっているの、問題を的確に理解するには、それを多角的にとらえて、全体像を把握しないといけないということを学びました。また、リベラルアーツ全体を通して、いわゆる一般教養ではなくて、少し専門的なことを学べたことで、ただ知識を吸収するだけではなくて、自分から問題にアプローチして、能動的に解決しようとするようになりました。ただ、これは私の問題なのですが、近い分野ばかりから授業を履修してしまって、理系の分野からは一つも授業を取らなかったの、文理融合という点では成功しなかったと思います。

まとめとして、私がこのリベラルアーツから得たことは、まず系列を履修することで、問題には多方面からの考察が必要であることが分かりました。このことで、リベラルアーツで学んだこと以外のほかの授業で学んだことに対しても、自分なりに多方面から考察するように心がけるようになりました。そして、その次が私にとって一番大事なのですが、自ら問題を提起し考察しようとする姿勢が身に付きました。これは私の中で、高校までの学びと、大学までの学びの大きな違いです。高校まではただ知識を与えられるだけだったけれども、大学に入って、問題を自分から、これはどういうことなのだろうと考えるようになったというのは、今の私にとって大学で学んでいることの一番大きな意義です。このことを1年生のうちから考え始めることができたというのは、その後の学びにすごく役に立っていると思います。

最後に、私からリベラルアーツを良くするための提案を二つしたいと思います。一つ目は、最初に説明したように、私はこのフォーラムに参加すると言われるまで系列で履修したことの意義というのを考えたことがありませんでした。私と同じような学生がきっとたくさんいると思うので、そのような人たちが系列全体を振り返る機会がもっとあればいいかと思います。そして、二つ目も私の経験からなのですが、結局文理融合といっても文系の科目しか取っていないという人もかなり多くいると思うので、すべての学生が両方から履修しなくてはならない、するようなシステムがあれば、文理融合がもっとできるのではないかなと思います。

以上で発表を終わります。ありがとうございます

ひとつの系列を通して得たこと

1. 様々な「危険と安全」について学んだ

⇒問題同士がつながっていることが分かった
⇒問題を多角的にとらえ、全体像を把握しようとするようになった

2. 文理融合リベラルアーツの科目を通して

⇒知識を吸収するだけでなく、問題について能動的に考えようとするようになった

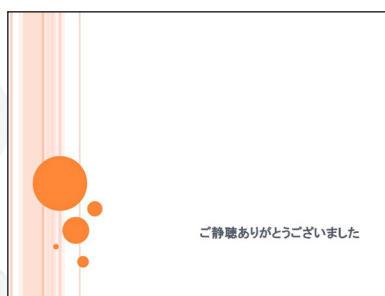
ただし、近い分野から授業を選択してしまい「文理融合」はならなかった

まとめ

1. ひとつの系列を通して履修することで、問題解決には多方面からの考察が必要であることに気付いた
2. 自ら問題を提起し考察しようとする姿勢が身に付いた

【提案】

1. ひとつの系列を通して履修した学生が、系列全体の内容を振り返る機会があるといいと思う
2. 文理融合のためには、一人の学生が文理両方から履修するようなシステムが必要だと思う



ご静聴ありがとうございました